

# 的外



みのる法律事務所  
弁護士 千田 實  
〒021-0853  
岩手県一関市字相去57番地5  
TEL : 0191-23-8960  
FAX : 0191-23-8950

みのる法律事務所便り  
第342号  
平成30年10月

みのる法律事務所 <http://www.minoru-law.com/> ✉ [minoru@minoru-law.com](mailto:minoru@minoru-law.com)

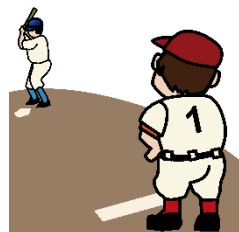


いなべん だべんく

田舎弁護士の駄弁句

③⑤

捕る前に  
投げることだけ  
考えた  
ボールは捕れず  
ボールは投げれず



平成30年10月13日  
青空浮世乃捨

中学時代、野球のピッチャーをしました。ランナーが出ていますと、ピッチャーゴロが来たら、どこへ投げるかばかり気になりました。

ボールを捕る前から、投げるのが気になり、ボールを捕ることは疎かおろそになっていたのです。ボールは捕れず、ボールは投げられませんでした。

もともと野球は下手でした。そのうえ、「ボールは捕らなければ投げられない」のに、ボールを捕る前に投げることを考えるという間違いをしていました。これでは、エラーするのは当たり前です。中学時代の野球は苦にがい思い出ばかりです。

野球も人生も、「いまの一瞬」に集中することが大事です。先のことは十分にとらわられ、いまの一瞬が疎かになってはいないでしょうか。



いなべんだべんく

田舎弁護士の駄弁句 ③6

いまやった

エラーが気になり

気も漫ろ

スピードはなく

コントロールはつかず



平成30年10月13日

青空浮世乃捨

さっきやったエラーが悔しくてたまりません。次のバッターに向かっているのに気も漫ろです。投げるボールはスピードもなく、コントロールもつきません。

エラーが気になり、次のバッターとの勝負に集中できないのです。これでは、いい結果はできません。もうピッチャー交代です。

やってしまった失敗に拘こたわっていても、前向きには進めません。失敗したことなど忘れ、「いまの一瞬」に集中することが大事です。「いまの一瞬」に集中するほかには、方法はないのです。

失敗という過去に拘るのはやめましょう。過去に拘っても、もう手遅れです。いまやれることに、いまやるべきことに集中しましょう。

## いなべんの哲学 その3

人生は、  
いまの一瞬を、  
まわりの人といっしょに、  
楽しみ尽くすのみです。



前々号では、『いなべんの哲学 (第1巻) —いなべんの哲学の意義』の「はじめに」と「第1段 16歳の少年の遺書」を、前号では、「第2段 少年の早世を悼む」と「第3段 いまの一瞬」と「第4段 いっしょに」の原稿を転載したところ、「これまでの法律や医療の本と味わいが違い面白かった」と語ってくれる方が何人かおりました。

近日中に『いなべんの哲学 (第1巻) —いなべんの哲学の意義』を発刊する予定ですが、早く続きを読みたいという方もおりますので、前々号、前号に続けて「第5段 知識と知恵」の一部を転載します。

前の頁で紹介しました、いなべんの駄弁句<sup>35)</sup>、<sup>36)</sup>は中学時代の野球での苦い思い出を例にひき「人生は、いまの一瞬を、楽しみ尽くすのみです」と申し上げたいのです。過去にも未来にもあまり拘らないで、「いまの一瞬」に集中すべきだ、ということをお願いいたします。

## 第5段 知識と知恵



知識と知恵は、似てはいますが異なるものです。次元が違うと言っても過言ではありません。「知識」は「ものごとについて知っていること」（角川必携国語辞典）であり、「知恵」は「ものごとの道理をわきまえ正しく判断したり、適切な処理をしたりする能力」（前同）です。

知っていることを、能力があると誤解しているのではないかと思える人をよく見掛けますが、知っているからといって、判断能力や処理能力があるとはいえないことは当然です。

「道理」とは、「ものごとの正しいすじみち」（前同）です。16歳の少年がそれまでわずかに知った知識によって人生の正しいすじみちをわきまえ、正しく判断したり、適切な処理をしたりする能力を持つことなどできません。

76歳まで生きてきて、ものごとの正しいすじみちをいくらかでも分りかけてきました。いくらか正しく判断したり、適切な処理をしたりする能力が身につけてきました。16歳の少年と後期高齢者が人生を語るのとは、その内容に差が出るのは止むを得ないことです。

知識は、頭のはたらきによって、脳に刻み込んだ記憶です。脳という肉体的というか物理的に存在するもののはたらきによるものです。知識を得るためのやり方は主として、脳に記憶を刻み込む暗記勉強ということになります。

知恵は、肉体的、物理的存在とは思えない心のはたらきによって、心に刻み込まれ、心が受けた印象です。知恵は体験によって得られた経験則に基づく判断力ですから、暗記勉強で得られるものではなく、直接自分自身

が、そのもの、そのことがらにぶつかり、考え、納得することで得られる  
ものです。



このように「知識と知恵」、「脳と心」、「記憶と印象」などを峻別し  
なければ哲学は語れません。言葉は悪いのですが、味噌もくそも一緒にし  
ては、哲学は語れないのです。哲学を語るためには、違いが分かる心が必要  
です。

これは、近代自然科学理論の裏付けによるものではありません。私の 76  
年間の人生経験に基づき構築された心のはたらきです。これらの区別こそ、  
いなべんの哲学の基礎となっているのです。知識と知恵の区別ができない  
ようでは、哲学は語れません。

操は、秀才だったと思いますので、16歳にしてはしっかりした知識はあ  
ったのでしょう。<sup>がんとう</sup>巖頭之感の文章を読んだだけでもそれを感じられます。  
彼の知識は、現在の高校1年生の子供と比べたら、はるかに上のようにも  
思えますが、いかがでしょうか。

しかし、経験不足は否めません。知恵はまだまだだった筈です。ものご  
との正しいすじみちをわきまえることは、頭や脳で考えた知識だけではで  
きません。直接、自分自身がそのもの、そのことがらにぶつかった体験か  
らえた経験則から生まれる心のはたらきが不可欠です。

操少年は、経験則はまだまだだった筈です。16歳では人生の大事な部分  
に関する体験はまだしていなかった筈です。

そのような段階で、彼は、人生に結論を出したのです。わずかな知識  
だけで、ほとんど知恵がない段階で、操少年は人生に結論を出し、自らの  
命を絶ったのです。



操は、16歳まで得た知識に基づき「萬有の真相は唯一言にして悉す、曰く、『不可解』」としたうえ、「終に死を決するに至る」と結論付けました。

つまり、これまで得た知識ではこの世の全てのことが解らないから死ぬという結論を出したのです。これは、知識がベースとなっていることは明白です。知恵は、全く感じられません。

この結論は、早計だったと思います。はやまった考え方であり、軽率な判断だったと思います。知識は、それなりにあったのですが、知恵は皆無に近かったのではないのでしょうか。

16歳の少年の経験からは、その時点においてはそれが精一杯だったのでしょう。もっと長生きしていれば、知恵ができ、考え方、生き方は変わっていたと思います。哲学が生まれていたと思います。



お釈迦様は、「解らないものは解らないままでよい」と言われたそうです。知識としては知らないことがあっても、それはそれとして、知識だけに拘らない生き方、つまり知恵による生き方はあるのです。

体験からえた経験則ができてくれば、知識がなくても、生きる知恵が身に付きます。解らないことがあってもそれはそれとしてという境地に達すれば、「萬有の真相不可解」を理由に自ら命を捨てることは愚かなことであることに気付きます。16歳の操は、まだ知恵が未熟だったのです。

操も76歳まで生きて、多くの人の支えでここまで生きてこれた、という感謝の心が止めどなく湧いてくるようになるまで生きていければ、知識的に「不可解」だからといって死を選ぶことなどしないで、それはそれとして



生かされている間は生きて、世の為人の為になりたいという知恵が生まれたのではないかという気がします。

操は、知識はある程度あったかも知れませんが、知恵はまだまだだったのでしょ。

いまだ16歳の操には、知恵の基となる体験が少なく経験則が構築されていなかった筈です。知識に比べ知恵が遅れていた結果16歳で自ら命を絶ったのです。

もっと長生きをし、体験を積み重ね、経験則による知恵ができたうえで判断してほしかった気がします。その意味で、彼の早世を悼みます。

物理的とか、科学的とかの知識レベルではどうしても解らないことがあることを認めることは、悲観すべきことではありません。物理的・科学的に解らないことがあるからと言って、希望を失って、ものごとを暗い方へばかり考える必要などありません。

物理的・科学的に解らなくとも、希望を失うことも、物事を暗い方へばかり考える必然性もないのです。知識がないからといって、落ち込まなければならぬなどということはありません。

もし、知識がない者は、暗い生き方をしなければならないということだとすれば、地球上の多くの方は、暗い生き方をしなければならないことになってしまいます。ですが、地球上の多くの方は、操少年よりも知識はなさそうに見えますが、幸せそうに見えます。

人生を幸せだと感じている人は、あまり知識に拘らない人達のように思えますが、どうでしょうか。知識がなくても、楽しく生きる知恵があれば、人生を楽しむことができそうです。





## 『いなべんの哲学(第1巻)―いなべんの哲学の意義』

が11月に発刊されます。



前々号、前号、今号の3回にわたり、『いなべんの哲学(第1巻)―いなべんの哲学の意義』の「はじめに」と「第1段 16歳の少年の遺書」、「第2段 少年の早世を悼む」、「第3段 いまの一瞬」、「第4段 いっしょに」、「第5段 知識と知恵」の一部を紹介しました。

この後に、「第6段 悲観、楽観、諦念」、「第7段 近代自然科学理論の忘れもの」、「第8段 臨死体験」、「第9段 いなべんの哲学」、「第10段 7歳の孫娘の哲学」、「おわりに」、「おわりにの追加」と続きます。

この事務所便りでは、この後も転載するかどうかはまだ決めていません。一冊を一回にまとめて読むこともそれなりの意味はありそうですが、この事務所便りのように小分けにして読むことも意味がありそうです。

これからどうするかは、もう少し考えてみたくて、結論を出すことにしますが、『いなべんの哲学(第1巻)―いなべんの哲学の意義』発刊の御案内と、引き続き『いなべんの哲学(第2巻)―いなべんの哲学の実践 その1』を発刊することを御案内申し上げます。因みに、『いなべんの哲学―いなべんの哲学の実践』ではいなべんの哲学を実際に行うにはこう考えた方がやりやすいと思える具体策を述べてみます。

